

山行報告書

※ 大宮岳稜会 連絡先：遭難対策委員長／会長 阿 部 080-1063-3181
※ 遭難対策副委員長 鈴木 090-7422-7022 ※ 遭難対策委員 岩 田 090-3214-0294
山行報告書提出者：鎌田 康

山 域・山 名： 光岳 （2,592m）		（長野県飯田市）	
入山日：2025 年 8 月 17 日（曜日） 2 泊 3 日（前日泊含む） 帰宅日：8 月 18 日（月）			
プラン担当者 正：鎌田 副：鈴木			
参 加 者	L：鎌田 記録：鎌田 報告：中村 アムラ、小川、鎌田、島崎、嶋村、鈴木、 中村 男 4 名 女 3 名 計 7 名		
天候 両日とも晴れ			
8/16（土） 大宮駅西口集合 11：00			
8/16（土） 大宮駅前出発 11：00 車 →中央自動車道経由→17：00 ゲストハウス太陽堂到着 太陽堂で宿泊			
8/17（日） 太陽堂 4：00 出発 車 →5：30 芝沢ゲート駐車場 5:42 登山開始→6：06 弁天岩→6：50 易老渡（いろうど）7：03→11:55 三角点 12：01→12:21 易老岳 12:48→14：07 三吉平 14：10→15：34 光小屋 光岳小屋及びドームテントで宿泊 行動時間 9h52m			
8/18（月） 光岳小屋発 5：29→5：39 光岳 5：52→5：56 光石 6:08→6：13 光岳 6：24→6：35 光岳小屋 6：52→7：07 イザルガ岳 7：24→8：31 三吉平 8：34→9：48 易老岳 10：09→10：28 三角点 10：38→14：24 易老渡 14：40→15：32 弁天岩 15：34→16：02 芝沢ゲート駐車場 芝沢ゲート駐車場 16：30 出発 車 →22：00 大宮駅前到着 行動時間 10h33m			
荒天候時のエスケープルート：ルート引き返し（天候、 疲労度等を考慮し、撤退時間を決定）			
装 備 と 食 糧	共同装備：ツエルト(4) 共 同 食：なし 車提供者：鈴木、中村		
	個人装備： ヘッドランプ（予備電池）、コンパス、地図、ストック、手袋、スマホ（バッテリー）、シュラフ（小屋泊用）防寒着、レインウェア、水、着替え、ごみ袋、サブザック、サングラス 個 人 食：17 日朝食、昼食 18 日昼食、非常食		

感想	感謝の言葉 ○小屋の予約が取れなかったので、当初予定されていた日程を変更して何とか今回の定例山行（光岳）を終えました。久保さんご協力ありがとうございました。 百名山達成の祝辞 ○今回の山行で100名山の登頂を達成された嶋村さんおめでとうございます。 山行の感想 前夜泊のゲストハウス太陽堂には、中央道の事故渋滞が原因で若干遅れて到着。低廉な価格で泊まれる快適な宿でした。登山口周辺の宿泊施設が軒並み廃業していく中で、頼もしい存在だと感じました。次回泊まるなら、ぜひ宿のジンギスカン鍋を食べたいと思います。 前泊地から芝沢ゲートまでは、自動車でもとても狭い登り降りの激しいルートであった。なんとかほぼ満車の駐車場に2台の車を置いて、予定より遅く5:45ごろ歩行開始。易老渡（いろうど）まで車道を1時間余り歩く。そこから易老岳（いろうだけ）まで6時間近く、へこたれそうなほど辛い道程で、互いに励まし合いながら、12:30ごろ易老岳頂上に到着。その後は、多少の登り下りの繰り返しがあり、最後の急登を登り切ると、静高平という湿原に出る。午後3時30分過ぎ、約10時間の長い歩行を終えて、光岳小屋に到着。ドームテント組と小屋組に分かれて宿泊した。小屋の夕食がカレーと味噌汁だけでおかわりができなかったことを除いては、とても快適でスタッフも親切な快適な山小屋であった。宿の主人小宮山さんがアキレス腱を切って療養中のため、若者2人だけで何とか小屋を懸命にきりもりしている姿が頼もしく好感を持てた。 18日早朝、小屋の宿泊者がほぼいなくなった朝5:30光岳頂上を目指して空身で出発。5:40分ごろ登頂。その奥の光石（てかりいし）まで往復し、一旦小屋に戻ってリュックを背負って下山開始。イザルケ岳で360度の眺望を楽しんだあと静高平で沢水を汲んで、易老岳を目指した。約2時間半ほどで易老岳に到着し、そこからは本格的な下り道となる。易老渡までの道程は、長く険しいためゆっくり下りていった。しかし長時間の歩行のためか最後の方では、転んだり、尻餅をついたりするメンバーもでてきて、易老渡の手前200メートルほどのところでメンバーの一人が脚がつり一時歩行困難となったもののしばらく休息をとると歩行を再開することができた。何とか沢沿いの易老渡に14:30ごろたどり着くことができた。そのあとは車道をゆっくり歩いて4時ごろ全員芝沢ゲート到着することができた。 今回の山行は、二日とも10時間近くの長時間の歩行で、体力的には大変厳しいものだったが、天候にも恵まれ皆挫折することなく全員なんとか下山することができた。特に易老岳からの下山は、転倒したり、脚がつったり、膝痛などで私も含めて皆大変つらい思いをした。みんなで励ましあいながら長時間の歩行に耐えられたのであり、とても一人では困難な山行だったのではないかと思う。
----	--